



慶應義塾大学ビジネス・スクール

株式会社 博多座

～福岡市博多区下川端地区再開発事業～

平成12年5月5日の朝日新聞朝刊は、「博多座の入場者50万人を突破、大入りの人気維持」という見出しで、平成11年6月3日にオープンした福岡市博多区下川端地域の再開発事業「博多りバレイン」の一角を占める博多座の盛況振りを報じた。「昨年六月三日にオープンした福岡市の博多座の入場者が四日、五十万人を突破した。これには十二月の市民絵（ひのき）舞台の入場者数を計算に含めておらず、実質十ヶ月での突破となった。博多座によると、ほぼ予想通りのペースで、同じ博多りバレイン内で苦戦が続くスーパーブランドシティをしり目に順調な一年目となった。・・・博多座の客席稼働率は、こけら落としとなった昨年六月の「大歌舞伎」で九十八、六％を記録したのを皮切りに、同七月のミュージカル「ローマの休日」で九十七、六％、八月の「宝塚歌劇星組稔幸トップ御披露目公演」で九十四、二％と三ヶ月連続で九十パーセントを超えた。今年に入っても、二月の「博多座大歌舞伎、十五代目片岡仁左衛門襲名披露公演」が八十八、二％と人気を維持している。」

ちなみに入場者50万人目となった柳川市のご夫婦（お二人とも58歳）には、12ヶ月分の博多座のペア入場券と記念品が贈呈された。

朝日新聞の報道をさかのぼることおよそ半年、平成11年10月発刊の九州マーケティング協会季刊誌「九州マーケティング・アイズ」vol.11、1999秋号で博多座総支配人小坂弘治氏は、「芸術文化が都市を活性化させる時代」と題して次のように語っていた（以下同文抜粋）。

「「博多座」という劇場は、博多の旧中心地の再開発事業の一環として取り生まれ、一方かつて多くの劇場があった“芸どころ博多”の復活をめざして、福岡市と九州経済界の協力によって平成1年度に起案されたものである。未だその経済効果を予測することは早計であるにしても、これはゼロから生じた新事業としてとらえることができる。博多座は常時公演することによって劇場の総従業員数は200名を超え、さらに各演目のスタッフ・キャストは70名から250名の規模となり、これらの人々の多くは地元の人ではないから、スタッフ・キャストは完全に1ヶ月単位で福岡に滞在することとなる。観客は福岡市内県内を中

このケースは、慶應義塾大学大型研究助成プロジェクト「大学院アート・マネジメント教育のカリキュラム・モデル開発」の研究活動の一環として、本塾大学院経営管理研究科教授和田充夫がプロジェクトメンバーの協力を得て作成したものである。本ケースは教材として作成されたものであり、特定の経営の巧拙を記述するものではない。本ケースの記述内容の適否についてはケース作成者が責を負うものである。本ケースの作成にあたっては、株式会社博多座の小坂弘治氏、佐村美章氏に多大なご協力を戴いた。ここに改めて同座の両氏に感謝の意を表すものである。

平成12年12月